

第一卷

關東大地震火災紀念號

歷史圖真



歷史寫真第百二十三號

大正十二年九月二十五日印刷
大正十二年十月一日發行

大正十二年十二月一日第三種郵便物認可
（每月一、四、七日發行）

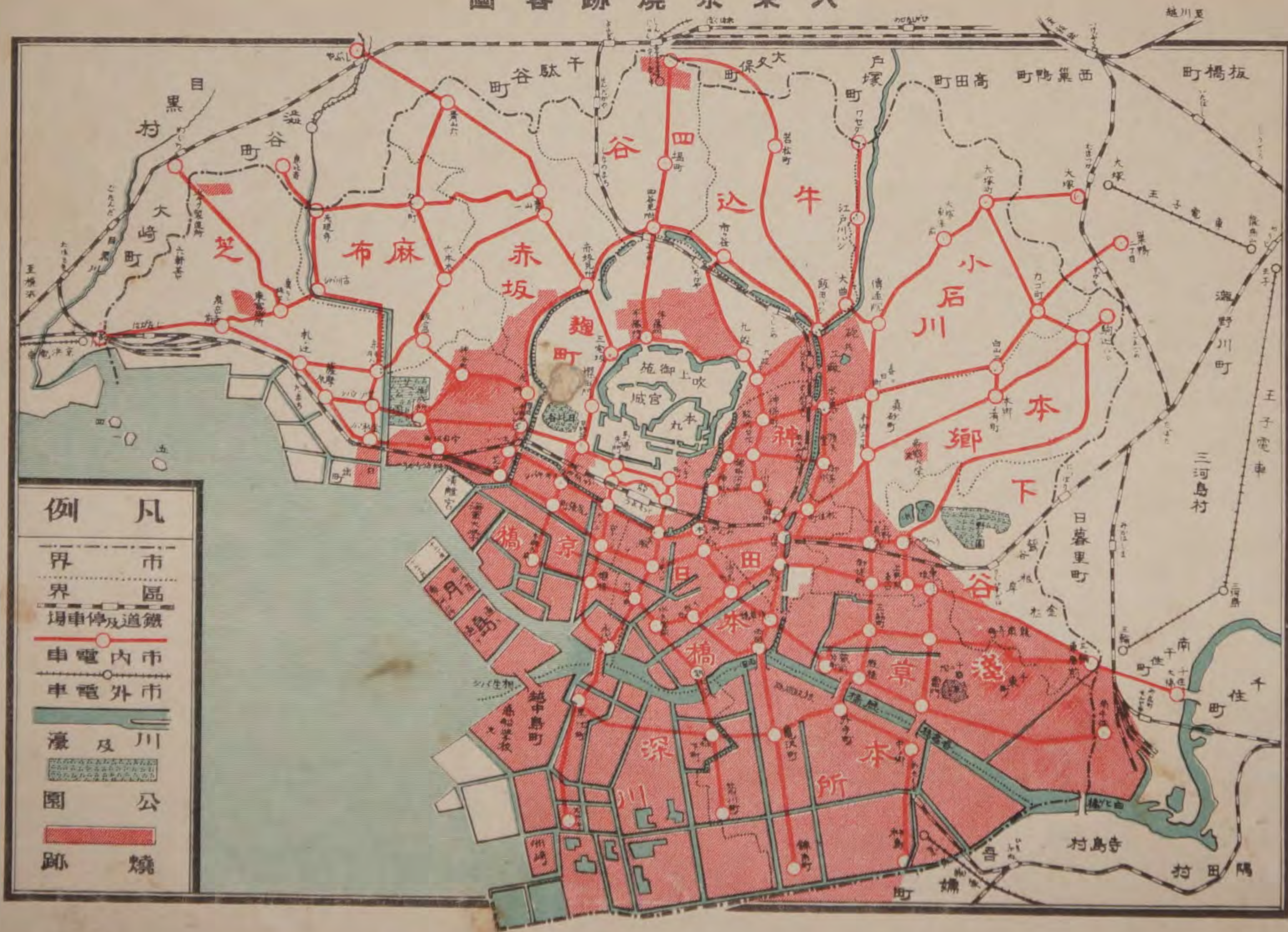
謹告

今回未曾有の大震災に際しては混亂中にも不拘早速御鄭重なる御見舞を辱ふし御懇情の段洵に難有厚く御禮申上候。東京市の大半を焼燼したる大火災の爲め神田今川橋々畔の弊會本部も大震當日の夕刻遂に類焼の厄に遭ひ申候得共、重要書類其他は焼失前既に強行搬出一切無難に有之り同時に従事員一同御蔭様を以て孰れも身邊別條無之候間乍憚御放念被下度候。唯だ此際最も憂慮に堪へざるは東京市内及び椏濱其他震災各地に於ける多數の會員諸君并に支局支部員諸氏が災害の爲に多大の犠牲を拂はれたる向きも定めて多々有之可申其の御安否に就ては日夜に懸念焦慮罷在候得共、災後匆忙の際未だ以て親しく御見舞も致し兼ね居候段何卒不惡御諒恕賜り度御願申上候。終りに弊會従事員一同這次の天災に際會して自らの誠を感ずる點尠からず、所謂禍を轉じて福と爲すの箴言を體し茲に一大勇猛心を喚起して従前に倍するの努力奮闘を重ね内外施設を充實して以て各位年來の御眷顧に酬い申すべく候へば將來引續き倍舊御愛讀の榮を賜り度偏に奉希上候 草々敬白

大正十二年十月

歴史寫眞會

大東京燒跡圖





首を落さるたれさ野上の大佛



「春さめや衆生救ひの大力者濡れてをばしぬ櫻が中に」とかの一代の歌人與謝野女史に依て歌はれた上野の山の大佛も未曾有の大震に遭ひて腕も首を振落され、うら枯れゆく初秋の樹かげに無残なる跣坐の姿を曝せるのも亦何となく痛ましき眺めである。大佛の前方地上に轉べるは即ち落ちたる首である。

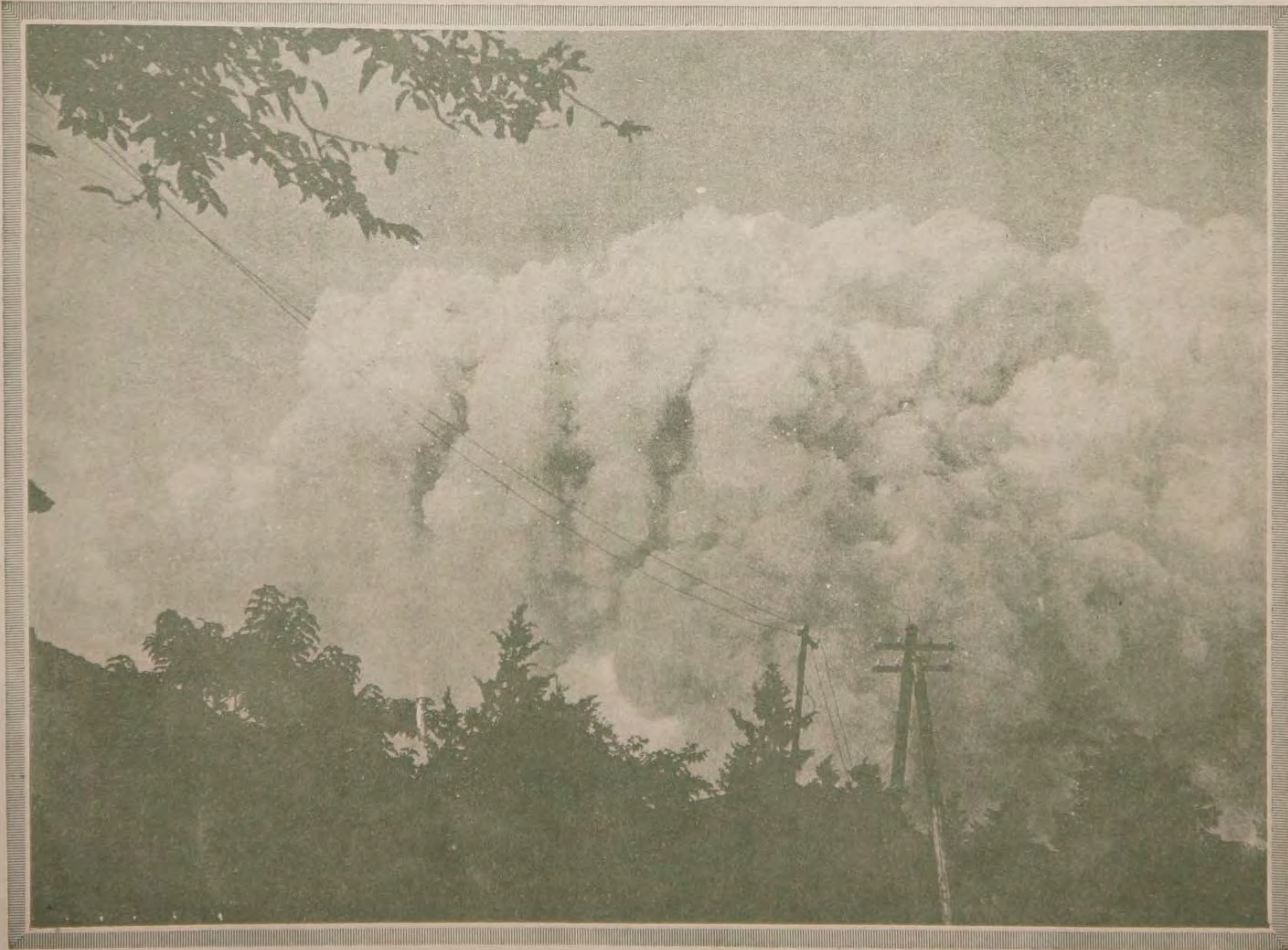


乗合荷馬車の出現のたし銀座街頭の奇観

店々のショーウィンドウに飾り電氣の光眩しく照り映ゆるところを羅すすしく長き舗石の上を行くは夏の夜の銀座街頭に於ける此の
 都人士が無上の慰樂となされたるを而も一夜の天變さしに輝やかなる光の巷を唯だ落莫たる焦土と化せしめ、此の帝都にして
 は古往今來未だ曾て見るを得ざりし駄馬の曳く乗合荷馬車疲れし首を淋しく垂れて木煉瓦の道を行く。陰慘悲愴の其の光景轉た今昔
 の感に堪へざるものがある。



大震當日東京市内數十個所より猛炎忽ち迸ると見る間に一天さながら指嵐を流すが如き黒煙を以て蔽はれ凄絶極まりなき其の光景に人々殆ど生きたる心地もなかつたが、頓て中天高く恰もかの綿操機械より吐き出す棉花を極度に大きくしたる如き形して轟々層々積み重ねられる塵大なる白雲の峰、漠々として立現はれ滿都の火炎是に反映して凄愴眞に名狀すべからざるものであつた。



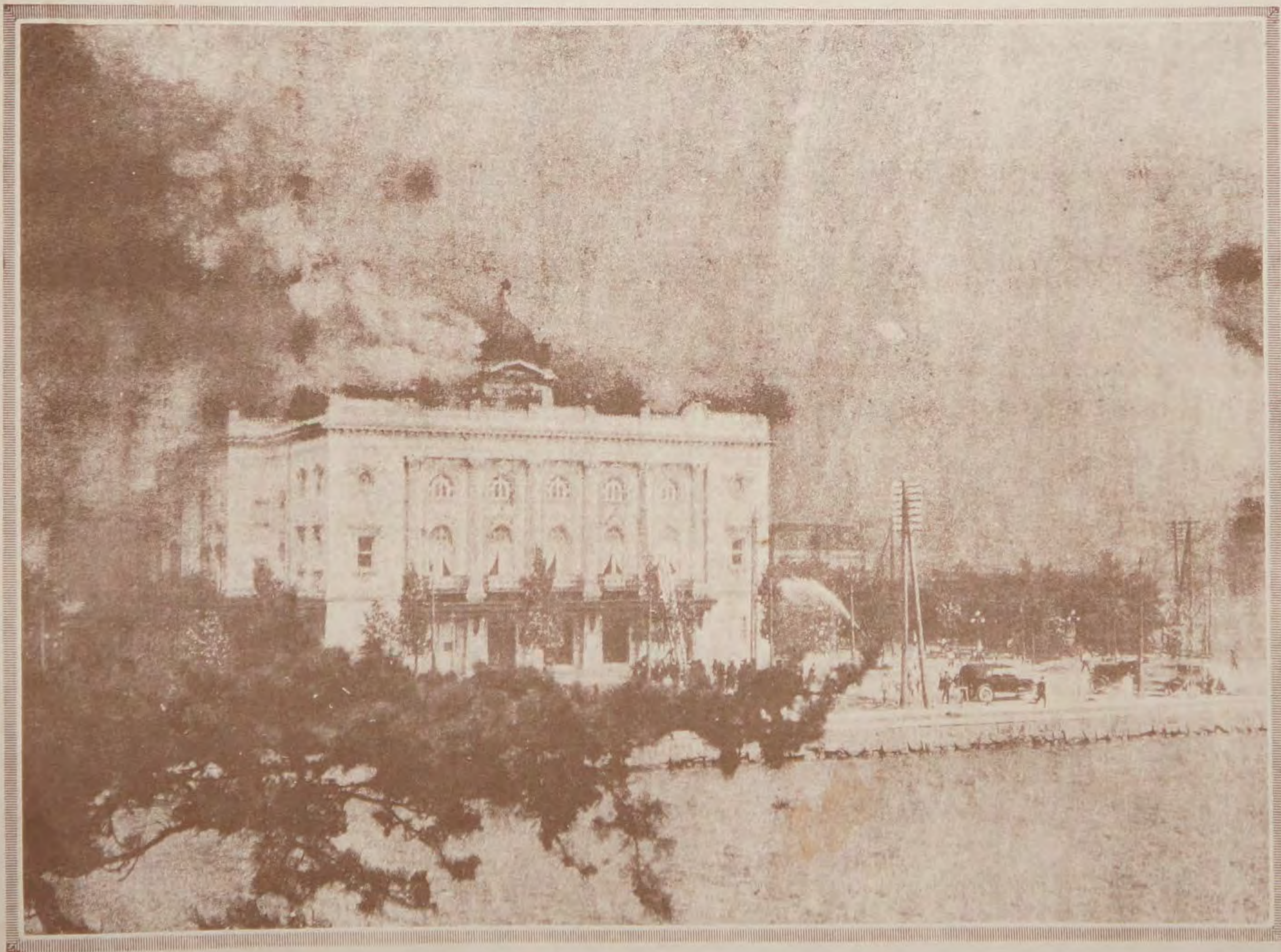
大震の當日東京市内數十個所より猛炎忽ち迸ると見る間に一天さながら指嵐を流すが如き黒煙を以て蔽はれ凄絶極まりなき其の光景に人々殆ど生きたる心地もなかつたが、頓て中天高く恰もかの綿操機械より吐き出す棉花を極度に大きくしたる如き形して轟々層々積み重ねられる塵大なる白雲の峰、漠々として立現はれ滿都の火炎是に反映して凄愴眞に名狀すべからざるものであつた。

大震直後日比谷電車交又點附近出火の光景



激震三回、火既に丸の内方面の屋上に立昇ると見る間に全市至るところ黒煙騰り夕刻既に下町一帯全く大火の海と化してしまつた。寫眞は警視廳の出火と前後して火を發したる日比谷公園前電車交又點附近の光景で、左方盛に黒煙を吐けるは大武寫眞館、中央全く倒壊せるは平野家料理店、右方黒煙に裏まれたるは陶々亭料理店である。

東洋第一を誇るたり帝國劇場火に包まれる



帝國劇場は明治四十四年の竣工に係り壯麗瀟灑の建物に華美優麗なる内部の構造と相俟つて理想的の一大劇場を形作り、東京名物の一たるを失はなかつたが、震災突發後一時間餘にして火を發し、東洋第一を以て誇りたる劇場も哀れ無残に焼き盡され僅かに其の鐵骨と外廓の白煉瓦のみを残すばかりとなつた。寫眞は即ち同劇場の圓天井より今や盛んに黒煙を吐き出せる光景である。

シヨシーテス橋世萬と像銅佐中瀬廣



神田區は一日午後零時半一ツ橋と三崎町より同時に火を發し十數年前の大火よりも更に一層激しく火は隣接の日本橋下谷方面から
 襲來し僅かに神田川河畔和泉町の一角を残したり他は悉く一瞬の焦土と化してしまつた。省線萬世橋停車場は堅牢なる建築物で地
 震だけにはさしたる被害もなかつたが同夜の大火には一たまりもなく焼き盡され、驛前には廣瀬中佐の銅像が何等の損傷も蒙らず獨
 りほつれんと須田町の目標になつてゐる。

お茶の水の附近の崖崩れを流る河の光景



お茶の水の附近の崖崩れは筆紙の能く述し得るところでない。即ち女子高等師範学校、順天堂病院、湯島聖堂等無残にも焼き押はれ向ふ側の外濠線路はお茶の水驛と水道橋驛間に於て幾十丈の高い崖が十数間河中に崩れ落ち全く水流を埋めてゐる。而もどす黒い水面には牛糞になつた夜具や家財が一面に漂ひ其の間に黒焦げになつた屍體が浮かび異臭を衝く有様到底二目と見られないものがある。

すともさ出掘を者存生りよ屋家壊倒の近附橋本日



大震襲來と共に人々は逸早く街路に飛び出したが逃げ後れたる人の多くは或は瓦石に擧たれ棟木に押潰され又は倒壊家屋の下敷きとなつて無残の死を遂ぐるに至り東京市内丈けに於ても賑死者の数は夥しき多数に上つた。寫眞は大震直後、日本橋電車交又點附近の倒壊家屋中に救いを求める聲微かに洩れ聞ゆるに人々駆け集り屋根を刺り穿ちて生存者を救ひ出さんとしつゝある光景であるが、間もなく猛火に見舞はるゝ迄に其の目的を達し得たか否かは頗る疑問である。

京橋々畔より俯瞰した銀座街の惨状



激震後間もなく京橋山崎町に起つた火災は西南の強風に煽られて数寄屋町、油山町、日吉町を甜め盡し一方日本橋方面より火龍の
 如く南下し來つた烟と共に銀座通に殺到し、東京隨一の股賑を以て誇る市街地は其の夜半迄に悉く焦土と化し、在りし當時の街衢の
 美觀今は早や想像だに爲し能はざるものとなつてしまつた。寫眞は京橋畔第一相互館樓上より俯瞰したる銀座街殘跡の慘狀である。

跡焼の近附店服吳越三び及橋本日



大地震の當日三越吳服店は恰も土曜日の事として相當の顧客もあり食堂の如き満員の有様であつた爲め叫喚と混亂騒ふるにもなくそれでも一同先づ無事に屋外に立退き附近の火の手も此の建物には及ばず午後五時頃まで無難であつたが午後五時半俄然屋内より火を發し東洋無比の大デパートメントも此の大災厄には勝ち難く遂に數千萬圓の損害を算して日本橋畔哀れにも痛ましい残骸を曝すことになつた。寫眞前方屋上に二個の高塔を有するは即ち同店である。

裂龜大の道軌車電るけ於にり通町利足市濱横



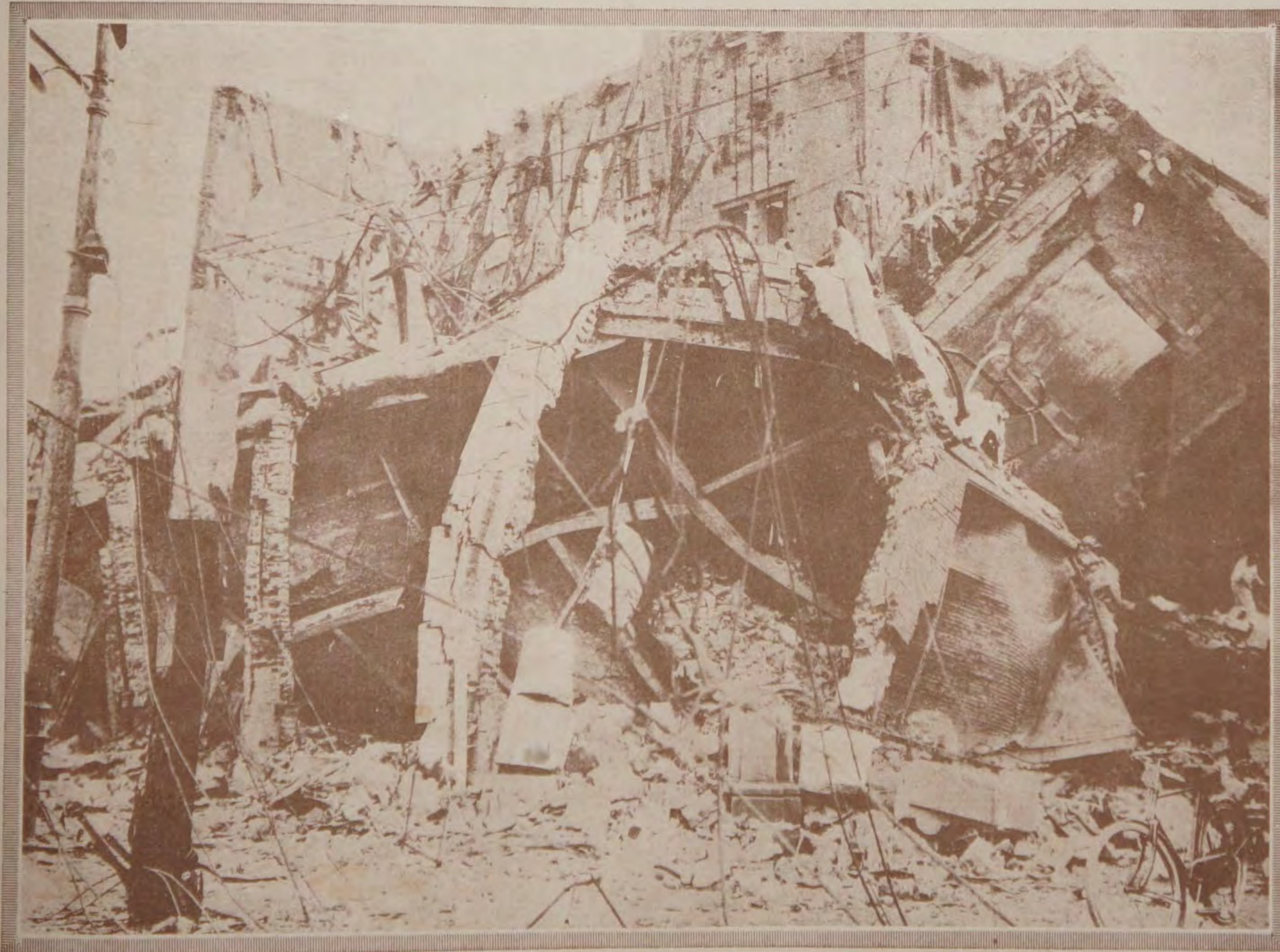
横濱方面に於ては九月一日正午少し前に突然空中に振舞されるが如き大激動起り次第で市内の家屋は殆ど將基倒しに倒壊し血みどろになつて喰くもの、路中に街路を走るもの七顧八倒右往左往の大混乱中、忽ち数ヶ所より猛焰立ちあがり僅々數時間にして帝國の最大關門我が横濱市は此の地上より葬り去られた。寫眞は同市足利町通り電車軌道に於ける地面の大龜裂を示すもので同地の地震が如何に激烈なものであつたかが窺ひ知られるであらう。

満目荒涼たる一大焦土の横濱市全景



死者二萬五千負傷者十五萬の多きを出した横濱市は翌二日になると解放囚人と不逞鮮人の襲來説に脅され、僅かに生命を取りとめた人々も悲苦と不安と饑餓と困憊とに心身全く縮の如く疲れ衰へて此の世の人とも思はれざる有様で此の狀態は爾後數日間繼續し慘憺の極に達するに堪へざるものがあつた。寫眞は文字通りの變野原となつた横濱全市を市内櫻木町驛より展望したる光景で在りし當時の繁榮は想像に及ばないところであらう。

跡焼の善丸橋本日るたし破大くなも影る見



日本橋三丁目に巨大なる煉瓦造りの三層樓を聳え立てたる丸善は歐米文化の潮を一手に汲入して是を日本全國に吐き出すといふ大使
命を以て自ら任じてゐた丈けに無数の外國書籍其他文化的百貨悉く備はり天下幾百萬の學徒の爲めに無くてはならぬ大店舖であつ
たが、此の未曾有の大震と大火に見舞はれては一たまりもなく眞に燐寸箱を踏み碎きたる如く見る影もなき慘狀を呈するに至つた。

上野廣小路松坂屋吳服店燒跡の慘狀



上野廣小路附近より發したる猛火は一は下谷車坂から坂本淺草方面に向ひ一は本郷團子坂新谷町、白山、日暮里に向ひ更に南千住に燃え擴がつて家屋全部を燒失し上野の山は下谷淺草の避難民無慮數十萬の多きに及んだが、廣小路の松坂屋吳服店は一日中は幸ひにも災厄を免かれたけれども翌二日に至つて火を發し遂に見る影もなく燒け盡されてしまった。巷間同店の火災は不逞者の暴虐的行爲に依るものと傳へたが此稿へ切までには其の真相を確かめ得なかつた。

像銅洲南の臺ラピるぬ尋を者明不方行



下谷浅草の兩區より生命からん、透れ出て上野公園に集つた避難民は無慮數十萬道溝坂から谷中墓地にかけて立錫の餘地もなく肉親を求めて泣き叫ぶ聲、負傷に憫みて喰く聲入れ亂れ慘絶凄絶響ふるにもなかつた。寫眞は災害の後、行方不明者を求むるピラ紙を獨り上野の山上に立ちはだかれる西郷南洲翁の銅像に無數に貼りつけたる光景で是等のピラは其他各所に數限りなく貼りつけられ何れも悲劇の一端を物語つてゐた。

荷馬車に乗てり都を落ちむと避難者群



激震襲來火災頻出と共に下町方面の人々は我勝ちに目星しき家財道具を取纏め各自附近の最も安全な場所と思はれる處に避難したが
 猛火は烈風に乗じて八方より襲ひ來つた爲め、多くの避難者は折角取出した荷物も遂に其儘見捨てて更により安全地帯に逃げ延
 びればならなかつた。それでも尙逃げ後れた人々の多くは忽ち煙に巻かれて悲惨な最後を遂げたのである。寫眞は幸ひ少し許りの手
 廻り品を失はなくて今しも一臺の荷馬車を雇ひ都を落ちんとして宮城前の廣場に差蒐れる一組の母子である。

兩國橋及び國技館附近に於ける大混雑の後



本所深川方面の猛火は地震と共に一時に五六個所より燃え上り列風に吹き捲られ、午後三時頃には殆ど通る道なく八方を火に取巻かれ、右往左往に逃げ惑ふ雲霞の如き避難民は或は被服廠跡の廣場に或は大川に架せる橋の上に又或者は河上に浮ぶ舟の上に通れたが是等も刻々に猛り立つ火焔に襲はれて其の大牛は無惨の死を遂げ、一時川の面は屍骸を以て埋められる惨状を呈した。寫眞は災害後兩國橋及び國技館附近雑踏の光景である。

多 數 死 者 出 た し 吾 妻 橋 の 墜 落 慘 狀

本所深川方面各所に火を發するや避難民は先きを争つて大川に架せられてある橋の上に集つた。吾妻橋、既橋、兩國橋、永代橋、新大橋等は何れも無数の人を以て埋められたが、かゝる間にも猛火は用捨なく橋の兩方より迫り來り是に伴ふ火の粉は雨の如く降りかかり幾百千の老若男女は手を聯ねて大川の流れに陥り、地震で死なぬものは火で死に、火で死なぬものは水で死ぬといふ悲惨事を現出した。寫眞は即ち燒失墜落したる吾妻橋假橋である。



日比谷附近一帯へ黒煙の渦



緒方消防部長の發表に依れば九月一日午前十一時五十八分の第一震以來僅かに十分間に東京市内に於て發火したものは實に七十六ヶ所で其の最初は風速十七米突の南風であつたが大いに伴つて風速を増し又數回に互つて風向きを變へ諸所に猛烈なる旋風を起し遂に意外の大火災を惹起すに至つたといふことで其間水道は全然閉塞し全く烈火の猛るがまゝに任せればならなかつた。寫眞は同日午後一時日比谷方面の猛火を馬場先凱旋道路より眺めたる光景である。

二重橋前廣場に於ける罹災者の露營生活

地震突發と共に各所に火の手が騰ると京橋日本橋神田方面の人々は我勝ちに荷物を持つて二重橋前の廣場に集つた。頓て日漸く沈み
 火炎益々猛威を逞しうして來ると生命からく遁れ來る者の爲めに道の廣場も全く人を以て埋められ其數何十萬といふ數に上つ
 た。寫眞は災害の翌日は等の罹災者焼け残りの亞鉛板を拾ひ集め俄か造りの假小屋を設へて僅かに雨露を凌ぎつゝある光景である。

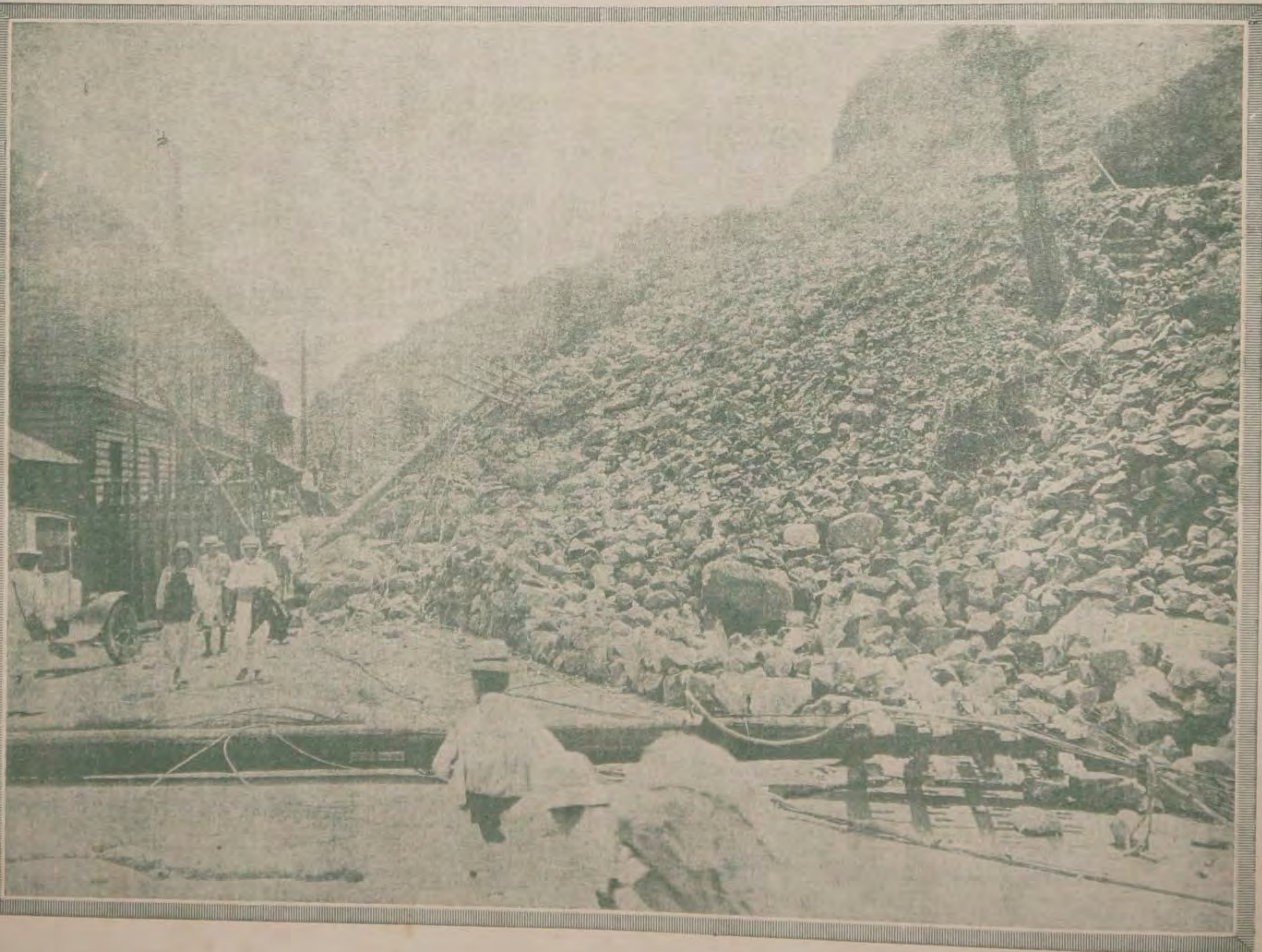


震災後の横須賀に來た路傍の俄か洋服屋



横須賀及び横濱方面は震源地に近かつた丈に東京に比して激動甚だしく従て倒壊家屋も多かつた爲め罹死者の数は比較的非常に多かつた。殊に横須賀市に於ては大震直前同驛着列車で下車した數百名の旅客が鎮守府給品部の崖下を通行中崖崩れの爲め俄く其の下敷きとなり無残の死を遂げたなどは悲慘の極であつた。寫眞は震災後日ならずして横須賀市の某所に俄か洋服店が出現して相當に繁昌してある光景である。

れ崩山の賀須横るたし出を者死壓の名百數



横須賀市は九月一日第一回の激震にて道路は悉く崩壊し、家屋の倒壊甚だしく従つて死傷算無き有様で凄絶無残響へやうもなつか
 たが、別けて同市停車場前の山崩れで汽車を降りた許りの旅客數百名が悉く生理めとなり、百立方坪の土塊岩石は容易に取除く能は
 ず、同月十日過ぎには臭氣甚だしく蒼蠅蛆集して近づくべくもあらず一ヶ月後ならでは復舊覺えなしとの見込みであつた。寫眞は即
 ち山崩れの現場で此の下に數百の屍體があるのである。

場劇國帝と廳視警るたし焼全に初最



驚破地震と叫ぶと共に丸の内一帯の人々我勝ちに廣場に走り出で天を仰いで驚愕の胸を掻き抱く折柄、日比谷原頭巍然たる赤煉瓦の大建築物警視廳内に火を發し、紅蓮忽ち此處を燒盡すと見る間に火の手は更に其の隣なる帝國劇場に騰り、さしも東洋第一の大劇場を以て誇る白煉瓦の歡樂場も瞬くひまに燒き拂はれて不歸の微笑を湛へたるお濠の水に今は空しき此の二大建物の淋しい姿が映つてゐる。

店か俄の前門山寺上増芝るたれ免を禍災

芝區に於て焼失したのは芝口一丁目より金杉四丁目まで、同區の下町方面は全部焼滅し三日夕刻に至つて全く鎮火した。其の焼失家
 屋約二萬五千、死傷者二千人罹災者の數約十三萬人と註せられた。寫眞は幸ひにも此の災禍を免れたる芝公園増上寺の山門前に罹災
 者其他の爲めに俄かに出來た露店の繁昌を示すもので増上寺山内は無数の避難民を收容して殆ど立錫の餘地なく悲惨の光景眞に痛
 ましい限りであつた。



煉瓦の残骸を立て並べた浅草仲見世の惨状



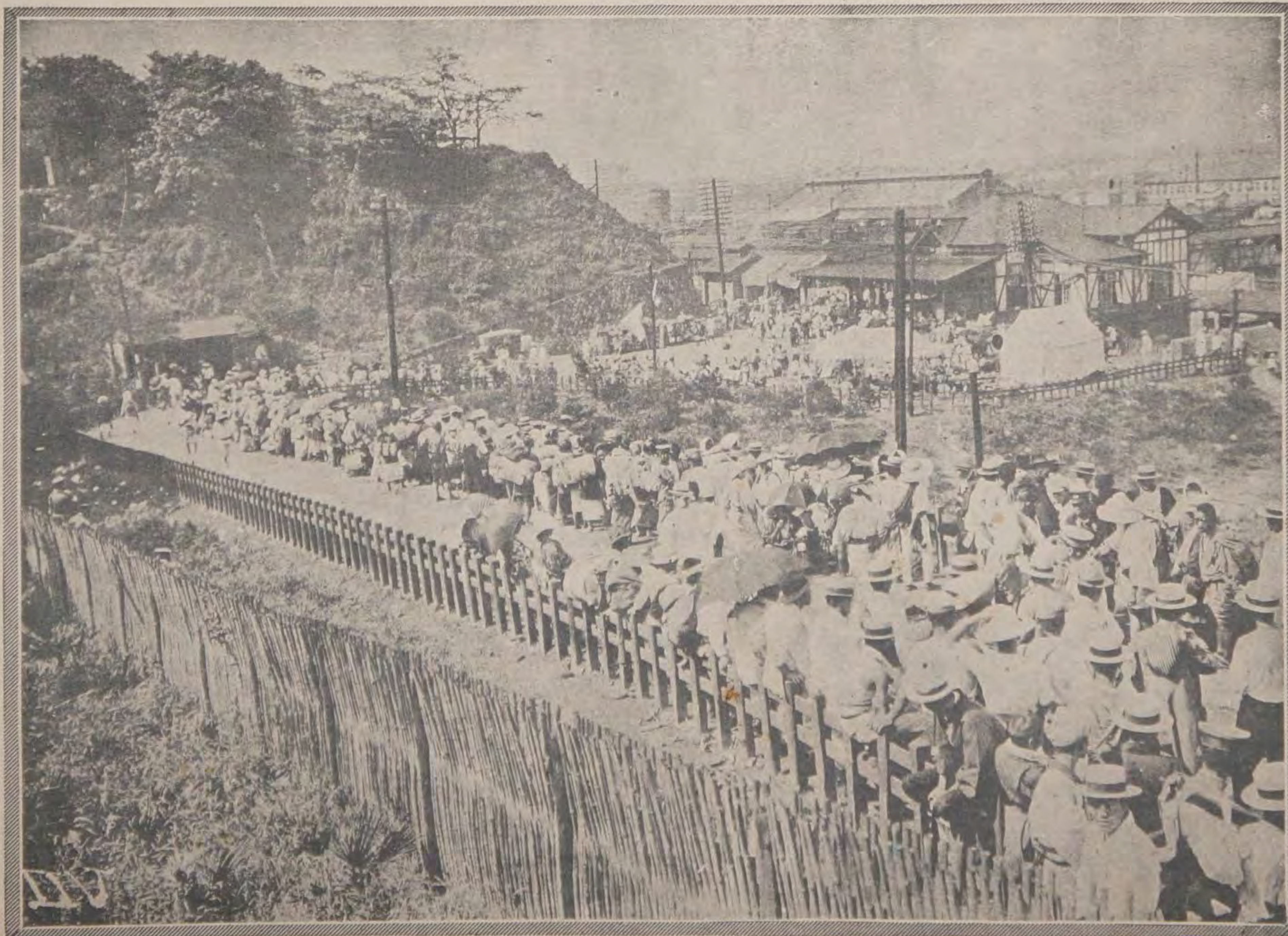
浅草區は大川岸の大層百戸許りの外、観音堂、仁王門、大増の七八軒を残し他は無残にも焼盡せられ、強震と火災の爲めに痛しき餘死を遂げたるもの數知れず屍骸は路上到るところに打倒れ凄風凜冽り鬼氣人に迫るの光景を現出した。寫眞は東京名物の一つとして地方の上京するもの必ず一度は訪ねべき観音堂前仲見世の燒跡で街路の舗石のみ僅かに在りし當時の俤を残し軒並悉く猛火に見舞はれてしまつた有様である。

大震に見舞はれたる二科會展覽會の場内の部



毎年の例に慣ひ二科會展覽會は八月下旬作品搬入と選抜を終り別けて今年には未曾有の最悪で總數三千餘點中より入選僅かに五十何
 點といふことで、いよいよ九月一日開會招待日といふ段取にまで行つてゐたが此の大震災の爲に出品畫及び彫刻物等は何れも大破し
 勿論展覽會は中止せられ、是に伴ひ美術院展覽會、帝展等何れも今年には取止められることとなつた。寫眞は二科展覽會々場内に多
 數の出品彫刻類落破壞したる光景である。

田端驛より地方に向つて避難する罹災者の大群



大震災と共に東京市内は素より附近一帯の交通機關は悉く一大故障を生ずるに至つた爲め市内だけでも百數十萬からの罹災民を容易く地方に避難せしむることが出来ず田端、日暮里、池袋、新宿、品川等の各驛に於ける混雑は名狀すべくもあらず多くの人は無蓋貨車の上や石塊の如く積み込まれ更に溢れた者は貨車の屋根から車の聯鎖の上にて絡みつき危険警ふるに物なかつた。寫眞は避難民の大群地方に落ち行かんとして田端驛に殺到せる光景である。

無蓋貨車に満充して品川驛を出る避難者の大群

何しろ東京市内だけでも百数十萬の人間が焼け出されたのであるから是等の避難者が或は故郷へ又は田舎の縁家へ更に或者は當途もなき旅の空へと市内を落ちゆくもの其数計り知るべからず品川、新宿其他の停車場は九月中旬に至るまで連日芋を洗ふが如き大混雑を呈した。寫眞は今しも品川驛より無蓋の貨車に乗せられたる是等避難民が各自の目的地へ向はんとする光景である。



階二十るたれ折は半と堂音觀草淺るたり残に的蹟奇



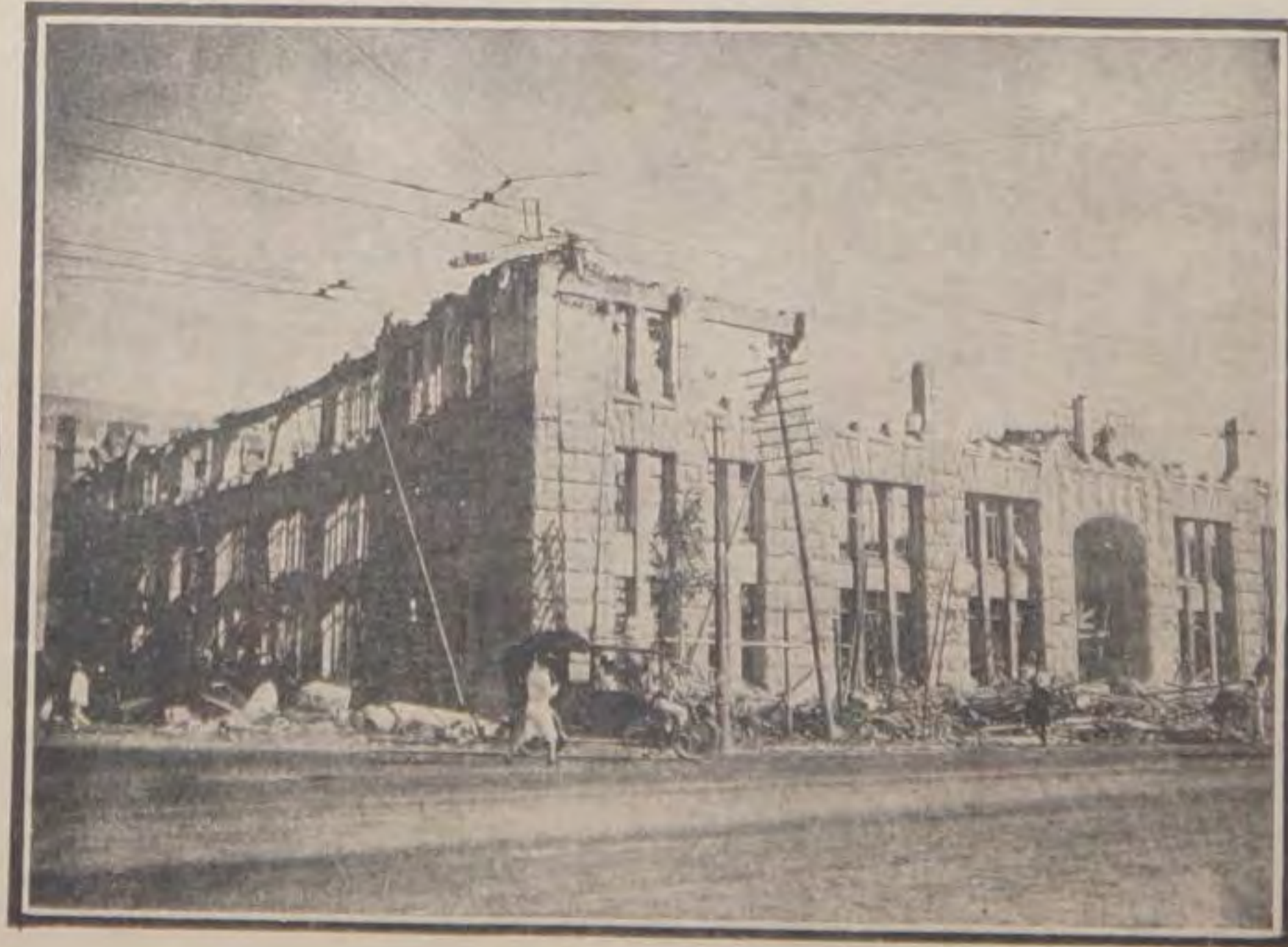
有名なる淺草の觀音堂は安政の大火にも不思議に焼け残りて、其の御利益のあらたかなるを知られ世の尊崇を博したのであるが、
 今回の大震火に際しても此の觀音堂は不思議にも殆ど何等の損傷に被らず一室際涯なき地野原の眞唯中に儼然として其の堂宇を
 存してゐる。寫眞の左は大震襲來と共に九階以上をばつきりと折取られたる淺草十二階の慘憺たる姿を示すものである。

宮城二重橋前石崖の崩壊と横濱附近大地の亀裂

畏くも宮城は其の御造管に細心の注意を拂ひ耐震耐火の設備遺憾なく整つてゐるのであるが、此の未曾有の大震にはさしも堅固の大
 宮居も若干損傷を受けさせられた。寛政の左に二重橋前の石崖が無残にも崩壊したる有様。又左は震災最も甚だしかつた横濱市の
 横濱橋附近に於ける大地が見るも恐ろしき大亀裂をなせる光景で、同市中には斯かる程度の亀裂が到るところに出来た。



東 京 市 内 に 於 け る 巨 大 な 建 築 物 の 被 害 状 況



今 回 の 大 災 害 に 於 け る 日 頃 如 何 に 堅 牢 壯 大 な 以 て 稱 せ ら れ て 居 っ た 大 建 築 物 も 完 全 な る も の は 殆 ど 一 つ と し て 見 出 す こ と が 出 来 な かつ た。寫 眞 上 段 右 三 井 物 産 會 社 が 内 部 を 全 燒 して 外 部 の 煉 瓦 の み 残 せ る 有 様。同 左 は 堅 牢 な る こ と 他 に 比 見 ず と 謂 へ れ た 日 本 銀 行 が 遂 に 其 の 内 部 を 燒 失 し た る 有 様。下 段 の 右 は 建 築 工 事 中 激 震 の 爲 め に 二 階 以 上 六 階 まで 墜 落 し 工 夫 の 死 者 二 百 五 十 餘 名 を 出 し た る 内 外 ビ ル デ ン グ、同 左 は 同 じ く 死 者 三 十 餘 名 を 出 し た る 中 央 電 話 局 で あ る。

景光の害被るた懺るけ於に賀須横び及濱横

今回の災害に就て東京市は其の七分通りを灰塵に歸せしめられたが、横濱及び横須賀の两市は實に其の全部を粉碎潰滅せしめられたので悲惨の光景は眞に筆紙に盡し難きものがあつた。寫眞上段右は横須賀軍港内海軍食糧品倉庫が崖の崩落と共に無残にも倒壊せる光景。同左は同市軍港通りに於ける所謂將棋倒しの倒壊家屋、又下段の右は横濱本町通り鮑跡の慘狀、同左は横濱港棧橋の見る影もなき被害光景である。



山の如く食糧品を積む罹災者に配給す



罹災者に對する食糧品の配給は政府の最も意を用いたところで災害發生と共に大阪在庫の米六十萬石を軍艦に依り東京に移送したるを始め、あらゆる食料を遺憾なく配給した。寫真上段右は築地本願寺境内に於て食糧品の配給を受けんとする罹災者の行列。同左は比律賓マニラより避難民救済の爲め來朝せる米國海軍の水兵等が帝國ホテルに於ける活躍。下段の右は關西方面より芝浦海岸に輸送したる食糧品の山、同左は芝浦寺境内に於ける食糧品の配給である。

關東大震大火の概要

「地震地或内」在る東京は約百年且毎大地震がある」と言つた東京帝國大

關東大震大火の概要

『地震地域内に在る東京には約百年目毎に大地震がある』と言つた東京帝國大學地質學教授今村博士の學説は茲に殆ど適中して安政二年江戸大地震以來七十年を閲したる大正十二年九月一日の正午關東一帶の地は未曾有の大地震に襲はれた。該地震は震源を伊豆大島と初島との中間海底に於ける地盤の陥落及び地這りに發するものと觀測せられ、最大震幅三寸より四寸に及び是が爲め相摸灘の東西より東京灣外房州に亘りて地積に大變動を來し、陸上震害の最も甚だしかつたのは京濱及湘南房總方面で、就中該地方に展開する東京、横濱、横須賀等の都會地は家屋の倒壊、人畜の死傷殊に夥だしく、而も地震に次で各所に發した猛火は折柄の烈風や旋風に煽られ眞に燎原の火の猛威を以て大東京の大半、横濱、横須賀の全市其他到るところの小都會小村落を滿目荒涼たる焦土と化せしめ、其の焼失戸數東京市に於て三十二萬戸、罹災者數約百三十萬人、横濱及び横須賀の兩市に於て九萬戸、罹災者の數約三十萬人、震死焼死を合算すれば東京市約十五萬人、横濱市約三萬人、其他を合計して二十萬人以上に及び、重輕傷者に至つては殆ど其數を知らぬといふ有様で、紅蓮の劫火渦卷くところ阿鼻叫喚の聲と共に壘々たる死屍は到るところの街路に充滿し凄絶無殘の其の光景焦熱地獄も啻ならず、開闢以來未曾有の一大慘劇を現出した。悲聞一たび天聽到に達するや太く宸襟を惱ませられ即時に御内帑金壹千萬圓を下賜して災民の救護を圖らせ給ひ、政府又前後數回莫大の豫備金を支出し其他内外各方面よりする多額の義金を合し、官民一致罹災民の救援と災害地域の復舊に其の全力を傾倒したが、萬般の施設甚だ機宜に適ひ漸時民心の安定と秩序の回復を見つつある一事は此の最大不幸に際して切めての喜びとするところであつた。

御断り

茲に圖らずも『關東大震大火記念號』を發刊するの悲運に遭逢しましたことを讀者諸君と共に哀しみます。同時に又、此の未曾有の慘害を永久に記念すべく絶好の寫眞帖を比較的迅速に編纂發行して汎く江湖に頒ち得たることを聊か快と致します。不測の災害に際して貯藏用紙の悉くを燒盡し、製版、印刷其他の作業機關に一大障礙を來しました爲め、内容外觀共に不備の箇所尠からざるは甚だ遺憾とするところではありますが、前後の情況御賢察の上、御不滿の點は幾重にも御用捨をお願い致します。次號よりは更に諸般の設備を整頓し本號に掲載洩れの慘害光景其他を満載して天晴『歴史寫眞』の眞價を發揮致したいと意氣込むでをります。何卒引續き御愛讀の程を偏にお願い申し上げます。

大正十二年十月

歴史寫眞會

當分の間本會の假營業所を左記の箇所を設置致します

東京市小石川區大塚仲町二十三番地

歴史寫眞第百二十三號(毎月一回一日發行)
大正十二年十二月一日第三種郵便物認可
大正十二年九月二十五日印刷納本
大正十二年十月一日發行

不許
複製

定價送料共一部
朝鮮、滿洲、樺太、臺灣 同 金五拾錢
其他外國 同 金八拾錢

本取
誌所

編輯兼發行 多田鐵雄
印刷所 東京市小石川區久堅町一〇八番地 博文館印刷所
發兌元 東京市小石川區大塚仲町廿二 歴史寫眞會